尾関さんとの学問的交流を振り返って

島崎　隆

尾関さんとは、同年代であり、問題関心も言語論やコミュニケーション論、さらに環境哲学やエコロジーの分野と、何か似たようなところがあって、お互いに学問的に、かなり近いところにつねにいたような気がします。その点では、いろいろな思い出がよみがえってきます。そして私自身、こうした哲学の学問分野に関しては、いつも尾関さんの後塵を拝してきたような気がします。分野が似ているだけあって、ご本などを拝読するたびに、なるほどこの問題はこういうように論点を提起して展開するのか、そうか、こういう新しい問題分野もあるのかと、いつもおおいに啓発されてきました。その幅広い問題提起、しかもつねに現代の新しいテーマを追求されており、しかも展開に無理がなく、これは承服されざるをえないという風に、説得的に叙述されていることが通例でした。

その点では、今回の311大震災、まさにこの現在進行中の未曽有のできごとをどうとらえたらいいのか、是非とも尾関さんにお聞きしたいという思いがあります。この事件も、生活と社会の破壊とともに、地震、津波、さらに放射能汚染の問題もあって、人間―自然関係をおおいに揺るがせています。これは一種、環境汚染、健康被害の問題でもあるわけです。これにたいして、理工系や経済・社会関係の人びとはおおいに発言していますが、人文や哲学の部門からはどう考えたらいいのか…。

過去を振り返る場合ではない、ともいえそうな昨今ですが、何事も総括は必要ですし、人生にも区切りはあるでしょう。尾関さんとの思い出を振り返りますと、『思想と現代』で、ご一緒に対談したこともいい経験でした（「『コミュニケーション』を通じて現代を語る」、『思想と現代』第21号、1990年）。当時は、私のほうがちょっと気負ったかたちになり、尾関さんの意向とはかけ離れてしまったと、のちほど反省した記憶があります。

さて、尾関さんの主著は、学位論文でもある、増補改訂版『言語的コミュニ

ケーションと労働の弁証法――現代社会と人間の理解のために』（大月書店、2002年。旧版1989年）であると思いますが、たしかにそれ以後のご本は、ここで展開された内容を、何らかのかたちで新たに問題としているといえるかもしれません。人間の大きな基本活動として、一方で自然にたいする労働があり、他方で人間相互の（言語を中心とする）コミュニケーションがあることは明らかであり、この二大活動をそれぞれいかにとらえ、さらに両者の関係をどう把握するのかということは、まさに一生かけても悔いない大きな問題領域でした。そして尾関さんは、この大問題に終生取り組まれてきたという感じがします。

「労働と言語的コミュニケーションはそれらの進化のなかでの相互作用を通じて互いを補いつつ完成させたといえよう」（改訂版109頁、旧版107 頁）、「本源的に、労働は、主体―客体関係における〈共同化〉をともなう〈対象化活動〉であり、他方、言語的コミュニケーションは、主体―主体関係における〈対象化〉をともなう〈共同化活動〉である。こういった仕方で労働と言語的コミュニケーションの内的連関が人間本性において語ることができるように思われるのである。」（ 改訂版112頁、旧版 110頁）

このさい、物質的生活過程では、そこにコミュニケーションが不可欠であるにせよ、生産的活動が主導契機であり、逆に、精神的生活過程では、言語的コミュニケーションが主導的な活動となる、と注意されます。尾関さんによってこうした鮮やかな総括がなされた時代は、旧ソ連・東欧の「社会主義」の再生・崩壊の時代でした。まさに本書は、そうした時代状況を色濃く反映しているといえます。そこでは、イデオロギー的な建て前からいって、労働による社会建設を中心とする社会主義の偏りがあり（「労働一元論」ともいうべき問題）、それとあいまって、民主主義的コミュニケーションを排除する国権的・官僚的社会主義の問題がありました。崩壊前の旧東独でも、旧ソ連のペレストロイカの影響もあって、遅まきながら、ユルゲン・ハーバマースのコミュニケーション論などがようやくおおっぴらに研究され始めました。ハーバマースの「システムと生活世界」図式との対決も、尾関さんのひとつの問題関心でした。

言語と労働の起源、サルと人間との進化論的つながり、労働と言語の疎外、

情報化社会における言語的コミュニケーション、認識・文学・教育の分野と言語・コミュニケーションとの関わりなどの多様なテーマを含む、尾関さんの実に幅広い展開は、現代唯物論の大きな達成点でもあり、本書『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』によって、私自身、おおいに学ばせていただきました。と同時に、私自身もそこから知的刺激を受けて、あらたに考えはじめたこともありました。それはたとえば、労働とコミュニケーションを相互に代替できない、対立的な活動様式と見て、さらにその両者の内的連関、相互浸透を追求することは必要なことでしたが、この両活動をまさに「同一性」においてとらえる局面はないのかということでした。つまり、コミュニケーション即労働、コミュニケーション的労働という観点です。そしてそこにこそ、労働の理想があるのではないか、ということでした。

高木仁三郎氏が石牟礼道子『苦海浄土』（河出書房新社、2011年、87頁に該当）を取り上げ、水俣の漁師たちの労働を解説したとき、それは、労働即コミュニケーションという境地ではなかったかと思います（高木仁三郎『いま自然をどう見るか』白水社、1987年、198頁）。もちろんここでは、あの水俣病の悲惨さの以前にあった、一種ユートピア的な世界がえがかれているわけですが。

「船の上はほんによかった。／イカ奴（め ）は素っ気のうて、揚げるとすぐにぷうぷう墨をふきかけよるばってん、あのタコは、タコ奴（め ）はほんにもぞか＊とばい。

壺ば揚ぐるでしょうが。足ばちゃんと壺の底に踏んばって上目使うて、いつまでも出てこん。こら、おまや舟にあがったら出ておるもんじゃ、早よ出てけえ、出てこんかい、ちゅうてもなかなか出てこん。…」（＊かわいい）

そこでは、魚やタコ、イカとコミュニケーションしつつ、しかし結果として、壺、竿、網、餌などの道具によって、巧みに獲物を釣り上げる労働が生じているわけです。ヘーゲルやマルクスのいう「理性の巧智 List der Vernunft」という知性と技術がそこではしっかり働いています。同時にそこで、その釣り上げた獲物には感謝しつつ、それをおいしく頂くということです。考えてみれば、動植物とコミュニケーションしながら、しかし最終的には、それらを殺して食

べるというのは、人間が動物のように本能で動いているのではない以上、最大の矛盾であるかもしれません。それをまともに自覚すれば、人間は罪深い動物だということにもなり、殺生を禁ずる仏教などにそれが明示されていることでしょう。いま述べた水俣の労働はきわめて素朴なものですが、それでも人間は、とくに〈農〉（農林水産業）の世界で、こうしたコミュニケーション的労働を従来は当然にもやっていたわけです。効率を重視するのではない、生活の必要の枠を超えない限りでの労働こそ、おのずとこのコミュニケーション的労働になっており、これは他方で、環境問題を引き起こすことのないエコロジー的労働であるともいえましょう。

ある意味で、人間相互におけるとともに、自然（労働対象）とも（周囲の人びととも）コミュニケーションの側面を保持する労働が、実は理想的な労働であり、自然を破壊しない労働でもありましょう。そこではまた、遊戯ないし遊びの境地にも近いものがあると思われます。

その点で、尾関さんには、『遊びと生活の哲学 』（大月書店、1994年）という、ユニークで注目すべき著作もありました。そこでは、人間の〈実践〉活動の二つの基本形態（原基形態）として「労働」と「コミュにケーション」を挙げ、「遊び」を〈非実践〉活動の基本形態として位置づけることができる、と述べられ、ある種の（すべてのではない）遊びが〈対象化〉と〈共同化〉を純化した仕方で目指すかもしれないと示唆されています（同書、166―7頁）。「労働」と「コミュニケーション」と「遊び（遊戯）」と、この三者は、微妙な関わりをもつようですね。

上記の漁業の「労働」では、何か「遊び」とも一体化しつつ、「コミュニケーション」が交わされていることでしょう。以上の意味で、三者の活動を概念的に区別しつつ、疎外されていない労働には、コミュニケーションと遊びの側面が必然的に付随するといえるでしょうか。そして、ユートピア的にいって、こうした労働は、対象に没入したときの「三昧境」に近いものかもしれません。対象と一体化し、自分が労働をしていることも忘れるほどの境地は、「遊び」にも近く、さらにまた、対象との距離がなくなり、それと交わり、一体化するという点では、「コミュニケーション」の理想にも等しいといえるでしょうか 。もっともマルクスは、尾関さんも指摘されるように、共産主義世界においても、

こうしたコミュニケーションや遊びと完全に一体化した労働を許容していなかったと思えるのですが、この点は省略します。

ところで、尾関さんとの論点に、自然との持続的共生の問題と関わって、自然を「主体」と見ることができるのかどうかという問題もありました。私はある時点から、人間のみではなくて、犬や猫を含めた高等動物、さらに栄養摂取して繁殖する植物においても、明確に「主体」の側面があるということを主張してきました。自然物に主体性を承認するということは、それらのものをモノ扱いせず、ある種、人間と同等にみなすという、立場の転換があると思います。ところでこれは、アリストテレス『形而上学』でいえば、万物を質料（ヒュレー）と形相（エイドス）の二大カテゴリーでとらえるさいの「形相」の側に妥当すると考えられます。なぜなら形相とは、質料を動かす、主体的な側面を意味するからです。植物では、形相は植物霊魂といわれ、動物では動物霊魂といわれ、人間でいえば、肉体が質料に当たり、魂は形相に当たるわけです。さらに、エンゲルスの弁証法的自然観では、すべての自然は何らかのレベルで自己運動性、統一性、自己関係性をもっているとみなされますが、そこにある意味「主体性」を付加してもいいのではないかと考えました。

たしかに上記の労働では、自然対象は同時にコミュニケーションの主体とみなされています。ペットの犬や猫ならば、十分に飼い主と感情的なコミュニケーションをやっているでしょうが、釣られてしまうタコやイカは、生物主体とはいえ、人間と十分にコミュニケーションをやっているとはいえないでしょう。そしてもちろん、無生物とのコミュニケーション、生態系の全体とのコミュニケーションといえば、直接の現実的なコミュニケーションはありえず、それは人間の側からの想像的なそれにしかならないでしょう。その点、ジェームズ・ラブロックの「ガイア仮説」などというものは、地球を何らかの主体とみなすこと以上に、あたかも地球自身に意志のようなものが想定されている感じで、一種の神秘主義になっているようであり、その点どうも賛成しかねます。「自然は生きている」という表現は、やはりどうも完全な比喩と思われます。いずれにしましても、自然の主体性については、主体性の発現の度合いという点で、その自然物に応じてある種のグラデーションがそこに存在するといえましょ

う。

　さて議論しだすと、尽きませんね。お互いに老齢となると体のあちこちがおかしくなるわけで、ぼくもいま目をしょぼしょぼさせながら、この原稿をパソコン画面上で打っています。思い起こせば、ぼくたちが院生の時代は、手書きが当然で、ゼミでの報告には、ゼロックスなどなく、青焼きの時代でしたね。
　これからもお体には十分にお気を付けながら、ご活躍ください。